

畢竟して何の用？

自分の内に還って教育を考えよう

—

若き日の道元禪師が宋の禪院にあって古人の語録を読  
んでおられた。道心のある僧が道元に問う。「日本の若  
い人、語録を読んで何の役に立つのか？」「古人の言行を  
知りたいのです」「それが何の役に立つのか？」「郷里に  
帰って人を教化する為です」「何の役に立つのか？」「衆  
生を利益する為です」「畢竟して何の用ぞ！」

「為（ため）にする教育」の是非論議は、今日に始ま  
ったことではなさそうだ。現代では現代なりの問題で大  
きく取り上げられているわけであるが、是非両論とも  
共通な姿勢としては前向きであることである。前向きは  
結構なことであるが、遠視的とか近視的目標を前方に置  
いて結果を期待しているわけだが、あるいは五十歩百歩  
と言われうるかも知れぬし、立場を換えると結果も逆に  
なりかねないとも考えられそうである。「人を教化しよ  
う」とか「人に利益（りやく）を与えよう」とかは世間

内のことである。前向きの姿勢で世のため人のためにな  
る積極的具体的な内容を寄与するために努めなければな  
らぬ。ただこの場合「ためになる」基準が無条件に前提  
されていて「基準」そのものは問われていない。強いて  
言えば生きていること自体が出发点であって、それは自  
明のこととされているのであろう。

ところでそういう「為にする」日々の努力が、「畢竟じ  
て何の役に立つのか」と問いつめられるとはどういうこ  
とだろう。若い道元はその場ですぐには合点がいかなか  
ったらしい。後によく考えてこの道理がわかった弟子に  
こう語っておられる。

「語録等を読んで古人の言行をも知り、迷っている人  
のために説いて聞かせると言うようなことは、自分の修  
行の為にも他人の教化のためにも全く無用である。ただ  
坐禅して一生の大事を明らかめ仏法の説く『心』の道理を  
明らかにしたならば、そのあとは一字も知らなくても他  
人に道を開示するのに使い尽くせない程の力が得られる。  
だからあの僧は、畢竟して何の用ぞと言ったのだと思い、  
これが真実の道理だと考えて、その後は語録等読むのは  
止めてひたすら坐禅して大事を明らかにすることが出来た」  
と。

話の前半は世間内のこと、後半は世間外、世間以前のことと言えよう。世間内の前向き姿勢に対して言えば、後者は正に後向きである。自分から世間に向かって出て行くのに対して、これは自分の内に帰っていく姿勢である。

現代は万事が前向き万能の時代である。朝から晩までやれ「幸福」やれ「繁栄」やれ「生き甲斐」をと前向きでなければ現代人たる資格が無いかのようである。(後ろ向きに歩くことは心身の健康増進に非常に良いと言われている。殊(こと)に山坂を登る時には格別の妙趣がある)

前向きと言ひ、後向きと言う基準はどこにあるのか。外の世界に邁進することも大切だがこの辺で一度百八十度転回し、世間に背を向けて自分の内に還えることを考えて然るべきではなからうか。所謂「原点」とやらに還って見てはどうであらうか。

## 二

仏教では自我意識の成立を第七識(末那)と第八識(阿頼耶)との関係において考へている。眼耳鼻舌身意の前六識は受動的感覚であり第七識は能動的思量である。

前六識からの内外の所与に対して末那識は「それは自分のもの」と言う我欲・我執の念を立てる。阿頼耶識は意識下の意識であつて、いわば意識の倉庫、根基である。感覚も意識も思量も、すべてそこに成りそれによつて存しそこから出てくる。ちようど草木の発芽し成長し開花結実にいたる元は外からは見えない地中に置かれた種子にあつて、種子の力が外に顕現してきたものにほかならないと同様である。(西洋の心理学でフロイトが深層意識を唱へ出したのは漸く今世紀になつてからである)

一体今日の我々が人類文化を誇つてゐるが、地球の歴史が数十億年であるのに、人類のそれがやっと百万年しか過ぎないといわれている。しかも自然の中に埋没し、自然と共に生きてきた最初の百万年から、徐々に自然を変へる能力を持ち、自然的環境に積極的に働きかけながら人類独自の文化を創り上げて来たのはほんの数万年以来のことであらう。人類の祖先が「意識」に目覚めると言う行為によつて「人間」になつてから、人間性は今日まで質的には変わつていないという。しかしそれだけに人類の歴史がどれ程苦難に充ちた数限りない体験を乗り越えて来たことか。それに伴つて生命の自己保存と持続の為に避け難く生み出されたであらう、諸々の煩惱、利

己心、貪欲、怒り、憎しみ、嫉み、愚痴が現在我々の内に益々健全（？）に息づきつづけていることには何の不思議もない。さらにもし人類以前の、生物としての長い進化の履歴にまで溯ることが許されるならば、生物進化の各段階におけるエネルギーの消長変化が、何らかの潜在力として我々の生命の内容に跡を残し影響を伝えていくとすれば、宇宙の生命誕生以来の各世代の一切の行為の効果の累積の場としての阿頼耶識の意味には限りなく深いものがある。そこには人間の本性の恐ろしい矛盾、真と偽、善と悪、美と醜、聖と魔……闇黒混沌の層々無尽の怪奇と神秘さに思いたらざるを得ないものがある。

何故こんなわかりきったことを今更らしく述べるかという、従来の我らはあまりにお人良しに過ぎたのではなかったかと思うからである。自分自身の素性についてお上品に考えすぎではないなかっただろうか。人間が生物進化の頂点としてあることに安易に思い上がってはいなかったであろうか？ 過去現在について楽観的であることは、そのまま未来の運命についても甘く見ることにつながらぬ。小は一家庭、一教室、一学園のことから社会、国、世界の諸問題に到るまで、現状は次から次へと我々

の楽観を裏切っている。身辺のあちこちに疎外感が霧のようにたちこめているかと思うと、足元には思いがけない「断絶」の溝が出来ている。失望し不信し挫折感が巷に充つると言っては誇張しすぎるのだろうか？

吾らはあまりにも本来の自分自身を忘れて、単純に「進化」を信じ「向上」を叫びひたすらに前向き姿勢を誇って来た。どれ！この辺で足を止めなくても良いから、ただ方向を変えて後向きになり、そこに阿頼耶識が暴露してくれる自己自身の真相に還って見るべきではなからうか。

### 三

生命が内に体験の一切を見る世界が阿頼耶識である。生命の歴史的経過は「業（ごう）」の作用であると言われる。業は「行（ぎょう）」であり広意の行為である。身体的行為。口によるもの、言語。心の中の営み、意識。この三つが三業であって相即連関する。三業によって人間の自己形成がなされる。

「業」の行為は原因結果の因果関係（縁起）を前提とする。「縁起」は「条件によって生起する」との意で「一切の存在は条件によって生起し消滅する。これが世界の真

実相である」と釈尊は悟ったと言われる。即ち生老病死の四苦。有限存在としての人間の不安は、その条件を変えることによって解消することが出来る筈である。一切は条件による相依関係に成立しているのであるから、固定した世間、固定した我というものはない。世間は無常であり我は無我である。我も世間も含めて一切は変化流転して止む所がない。固定的なものはどこにもない。

一切は虚しい。虚無である。その無常変転の過程そのものに人間の身、口、意の三業が参加する。現在の業については自由意志により選択が許されようが、過去からの業、宿業の場合はどうであろうか。宿業はどこからはじまったものであるかは知りようがなく自由選択の余地もない。何人も宿業から逃れることは出来ない。好むと好まざるとにかかわらず誰しも過去現在未来の三世にわたる因果連鎖の一環を荷負ってその上に昨日と同じく今日も、また明日も自己の三業によって自ら連鎖を作り拵げて行くのである。そこに流転無常の存在としての自己の根本責任があり、自因自果、自業自得といわれる所以（ゆえん）である。その日その日としては何らかの目的前の目的の為に営為しながら全体としては結局何の為に何に向かって成されるのか、我人共に知るところがない

のではないか。阿頼耶識の内容は業、宿業の所産である。これに依拠して末那識に「我」の意識が生ずる。我見、我慢、我欲、我執など諸々の煩惱が不断に湧き溢れて「我」を莊嚴（！）する。宿業が人間存在の根本的事実、無始無終の事実である限り、煩惱もまた無始無終無尽である。

宿業は単に「私」の作る業ではない。すでに業の中に生きている「私」なのである。煩惱も「私」の煩惱でなく「煩惱の中の私」なのである。「私の煩惱」と「私」の外に見るのでなく「煩惱の私」と内に省られるのである。現在の私にとって善きことも悪しきことも、すべてが宿業のもよおすゆえと内観させられるのである。（賢治さんの世界中の人が幸福にならない限り、と言う言葉の裏には、人間全体に対する「私」の根元的責任、自業自得の宿業観があると思う）

さて、煩惱も人間の本質である限りこれを否定することとは生そのものを否定することになる。どんなに否定してみても否定されないものが自己の中にある。それが煩惱である。否定し切れない根元の悪、真実の認識を障礙するもの、それが生の本性ではなからうか。さりとして悪をそのまま放置することは出来ぬ。それでは生そのもの

が混乱し頽廢し、破滅におち入って行く外はないからである。

阿頼耶識は、いわば自己の内なる無辺の闇、底知れぬ深淵を示唆する。一步誤れば絶対の虚無が待ち構えていることを警告してくれる。

永遠の闇そのままに輝かしの真昼の光明の下、底なき深淵そのものの無底の底に立つ、そういう願求そのものも虚しい幻影に過ぎないのであるか。

#### 四

如何にしてこの自己矛盾から脱退することが出来るか。

この場合大切なことは生そのものが問題なのであって、個人の救いが問題ではない。生々流転の中から生を全体として救いあげ、恒転暴流の煩惱をその根元において断ち切ることにある。(賢治さんの先の言葉もこの意味であろう)

この課題の解決について、釈尊成道時の正覚の内容を滅後二千年の時代経過に相応せしめられて、そのぎりぎりまで発展展開されたのが親鸞聖人である。その間の消息を八十六歳の晩年に次の様に述べ讃えておられる。

無明長夜の燈炬なり

智眼くらしと悲しむな

生死大海の船筏なり

罪障おもとと歎かざれ

願力無窮(むぐう)にましませば

罪惡深重もおもからず

仏智無辺にましませば

散乱放逸もすてられず

以上 私は阿頼耶識の暗い一面だけをあまりに強調しすぎたようではあるが、その苦悩の暗黒面あってこそ他面今日のいささかなりとも明るい(?)文化の世界が我々に与えられていることを忘れてはならない。文化は言うまでもなく世々代々の肉をそぎ骨を削つての労苦の結晶でないものはない。一例として常不輕菩薩(じょうぶぎようぼさつ)の話(法華經第二十)

過去と言つてもお経に出てくる時代の年数やその中に生まれかわり生まれかわり出てくる仏菩薩の寿命の表現は、誠に天文学的数字そのもので、とても今の我々が想像出来ない程無量無限のものであるが、阿頼耶識と言

う履歴書の上から見ると決して誇大虚構のものではなく、人間の意識体験の内省として如何にもとうなずかれるものである。無数の仏様達が相次いでこの世に出現して衆生の為に法を説き、衆生それぞれの分に応じて悟りを開かせておられたある時代に、一人の僧があつて常不軽菩薩と呼ばれた。何故かと言うと、この僧は日頃から經典類は一切読まないでもっぱら礼拝を行つた。あらゆる階層の人達に出会う度にその人に向かつて「私は深くあなた方を敬います。あえて軽慢致しません。何故ならば、あなた方は皆菩薩の道を行じてまさに仏に成ることが出来るからです。」と言つて礼拝した。中には礼拝されてかえつて腹をたて悪口罵言したり杖木瓦石で打擲したりするものさえあつても少しも逆らわず、走り避けてなお声高く彼等を賛嘆礼拝して止まなかつた。こうしてその生涯を通してこの不軽の礼拝を行じたとする。この話は二つの意味がある。一つは、人は仏性である。仏に成れるという自覚を持たねばならぬと言つこと。もう一つはその自覚に立つて菩薩道（他を救う、他の為に働く）を實踐しなければならぬということ。

自覚と覚他の両面である。因縁宿業の話であるからこの話には当然後日譚がある。常不軽菩薩はこの後、法華

経を誦讀することが出来、数え切れぬ程永い時間の間に幾千万億の仏様に逢つて修行し幾代も繰り返し、遂に仏の境涯に到達したという。最後にこの話をしておられる釈尊が申される。「この常不軽菩薩は実は他の人ではなく今のこの自分であつた。その時悪口したり石を投げたりした人達は、今この話を聴いている弟子達、お前達である」と。

自分はこの世で修行して仏になつたように思われるけれどもそうではない。限り無い過去からの永い間の自覚と実践の積み重ねの結果であるということであろう。一つのどんな小さいことでも、それが成るためには遠い昔からの目に見えない無数の因縁の糸の結集があること「遠く宿縁を慶べ」と言われる。

「お早よう」と教師と子供が交わす朝の挨拶 ただこの一つの簡単な相互礼拝の行がどうして現実の声として現わされるのか、その一声が集団生活、社会生活の中でどんな位置を占めどんな意義を持っているか。「お早よう」の声を耳に受け口に出す時に、何らかの心の重荷を感じたことのない教師は幸い（？）なる哉（）

補記 煩悩について

一、教育は現実には教師と子供との煩悩関係（本能と本能、感情と感情との直接関係）であろう。間違った子供に対して「正しい教師」が「正しいこと」を要求するのは理念にすぎない。親の煩悩に照らされて子供の煩悩が消える如く、煩悩は煩悩によって消される以外に救いはないのであろう。

昭和四十六年九月 お彼岸の夕 記す